

地にかたちなく

松本健一

地にかたき

河川書房新社

地にかたちなく

一九九一年八月二〇日 初版印刷
一九九一年八月三〇日 初版発行

著者略歴

松本健一（まつもと・けんいち）
一九四六年、群馬県生まれ。東京
大学経済学部卒。七一年、『若き
北一輝』を刊行、近代日本思想史
に鮮やかな衝撃を与える。以後、在
野の精神を基軸に、政治、思想、
文学など、広範な領野で評論活動
を展開。評論に『石川啄木』『北
一輝伝説』『三島由紀夫亡命伝説』、
小説に『エンジェル・ヘアー』な
どがある。

著者―松本健一

装丁―高麗隆彦

発行者―清水 勝

発行所―河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 (〇三) 三四〇四―一二〇一(営業)

三四〇四―八六一一(編集)

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷―大日本印刷株式会社

製本―小泉製本株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたしません

© 1991 Printed in Japan

ISBN4-309-00714-7

目次

第一章	氷の雨	5
第二章	密林の墓	31
第三章	あを雲のはて	63
第四章	涙河	93
第五章	海峡の雪	125
第六章	天上の花	153

地にかたちなく

第一章 氷の雨

(男の人って、結局は死ねばいいとおもっているんだから)

母がずっと以前に呟やいた言葉が、英次の頭のなかで鳴っていた。足元には、香良洲^{からす}浜に寄せる規則的な波音がしている。

海の上えはまだ明かるさを残しているが、英次の歩く防波堤の上には夕闇がせまりはじめていた。ゆるやかなカーブを描いた堤のさきのほうは、すでに薄明の奥に消えていた。薄明のさきに、隣町の火力発電所とおもわれる灯がぼうつと光ってみえている。

四十四年まえにはこんなコンクリート製の防波堤はなかったのだらうな、と英次はおもった。すくなくともあの男の遺した日記には、コンクリート製の防波堤の存在を想像させるような記述はなかった。むざんなものだった。

防波堤の両側に目をこらしてみると、右手のほうは砂浜とわずかな松林があるばかりで、す

ぐ伊勢湾に接していた。左手のほうは、砂浜を改良したらしい畑が防波堤に沿って作られてあり、その奥に堤と平行に桜並木の植わった土の堤がつづいていた。なるほど、ここよりあの土手のほうが古い防波堤なのだな、と合点がいった。伊勢湾は内海だから、あれくらいの小ぶりの土手で大体のばあいは波を防ぐことができるのだろう。

英次はその土手をながめながら、かつて三重航空隊の若ものたちが毎朝ランニングをしたという桜並木の道は、あれだろうな、と見当をつけた。

かれがこの香良洲浜を訪れたのは初めてだったが、あの男のことなら、生まれや育ちはもとより、その死に至る最後の日々をすごした三重航空隊の概要や配置図さえすべて頭に入っていた。にもかかわらず、英次は生まれてから四十四年間、いや、あの男がじぶんの父親かもしれないと思いついてから三十年ちかく、あの男から目をそむけるように生きてきたのだった。

それが、今朝、何気なく点けたテレビから天皇崩御というニュースが流れた瞬間、英次はあの男に会いにゆかねばならない、という想いに囚われてしまったのだった。いや、あの男はもう四十四年もまえに自決しているから、せめてその自決の現場に行ってみよう、とおもったのだ。

ときどき雪に変わる氷雨の悪天候にもかかわらず、急に着替えをはじめた英次にむかって、

妻の佐保子がげんなりな表情をうかべた。

「あなた、どうしたの？ 今日土曜日で、会社は休みでしょ。何か約束でもあったの？」

妻のうろたえたような声の調子からすると、英次が思い詰めたような顔付きをしていたのだろう。（いかな、そんなに思い詰めた表情をしては）とおもった。けれど、妻にあの男のこゝとを話したことがないのだから、いま急に事情を話したところで、うまくいかないだろう。それに、天皇崩御の報をきいて反射的に、あの男のことを（可哀そうに）と感じた心理をじぶんでもうまく説明できるとは、とうてい考えられなかった。

三十年ちかくも目をそむけるようにして生きてきたあの男の自決した場所に行ってみたい、という欲求は、じぶんにも何とも説明のつきかねるかたちで急激にわきあがったのだ。佐保子は重ねて答えを要求したりしなかった。けれど、

「あなた、何だか知らないけれど、御飯だけはちゃんと食べていってね。身体をこわすといかないから」

といった。このようなときに、どうして飯を食べなければならぬのか、英次は人間というものゝの滑稽ささえ覚えた。ただ、妻に余計な心配をかけることはないとおもい直し、だまつて飯を食べた。食べ終わると、行き場所だけは告げておこう、という気になった。

「三重県の香良洲浜まで行ってくる。松阪の隣の、伊勢湾に面した海岸だ」

「三重県って、今から行くと、むこうで泊るわけね。明日帰ってくるの？」

「ああ、たぶんな。もしかしたら、もうすこしかかるかもしれない。月曜までかかったら、会社のほうに連絡しておいてくれ」

「そこに何かあるの？」

「父親の死に場所さ」

「父親って、あなた、おれは母親の私生児だって、いつてらしたじゃないの。おれの父親はわからないって、ハッキリそういったわよ。誰だか、わかったの？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……。とにかく行ってくる」

東京駅についたのは、もう昼に近い時刻だった。水雨はまだ止みそうもなかった。駅に置かれたテレビの画面は、天皇崩御のニュースと、その生涯を回顧する特別番組とで埋められている。街頭インタビューのため、ときどき映る全国各地の風景も、雪と雨とにぬれていた。

水雨があがったのは、名古屋で乗り換えた列車が津に近づいたころだった。香良洲浜はその津と松阪のほぼ中間にある。英次は津で列車を降りると、駅前からタクシーを飛ばした。バス路線もあるにはあったが、ゆっくりとバスを待っている心の余裕がなかった。

香良洲浜までは三十分ほどかかる、とタクシーの運転手がいうので、英次はそのあいだ、公刊されたあの男の『遺書』を読んだ。それは、これまで何度も何度も読み返され、暗記するま

でなつてしまつていたものだった。

「両親様

先立つ不孝御ゆるし下さい。二十年間御苦勞のかけつばなしで何一つ御つかえもせず、またまた深い悲しみを御かけ申すこと、かえすがえすの親不孝なにとぞ御ゆるし下さい。

御国の御役にも立たず、何の手柄も立てず、申し訳ありません。死んで護国の鬼となります。私は生きて降伏することは出来ません。私が生き長らえていたら、必ず何か策動などして、恐れながら和平の大詔に背き奉り、君には不忠、親には不孝と相成ること目に見えるようであります。……」

それは、終戦の詔勅をまえにして、じぶんは「生きて降伏することは出来」ないといつて、昭和二十年八月十六日の夜に自決していったあの男の『遺書』だった。英次はこの『遺書』を讀んで、「死んで護国の鬼となります」という箇所にくると、いつも、

（馬鹿め、死ぬやつがあるか）

と呟やきたくなるのだった。（死ぬべきやつは、おまえではないぞ）、といまにも口に出し
そうだった。

「日本はこれからどんな辛い目にあうことでしょう。御両親様はどんな悲しい目にあわれることでしょうか。それを思うと、覚悟も鈍ります。しかし私が生きていたら、きつと和平を破

り国策に反し、ひいて累るいを眷族けんぞくに及ぼすに至らんことを恐れます。私の魂は必ずや父上母上のそばに参ります。アメリカが来たら御そば離れず御まもりいたします。どうか御心を安らかに持たれて、日本が再び立ち直る日まで御長命下さい。

法華経によると、今から十年後には必ず日本が世界を統一して人類が天皇のもとに永遠の平和を楽しむ日が来るのであります。田中智学先生の予言に明らかに示してあります。先生は日蓮聖人研究の第一人者であります。その日まで、どうか父上も母上も御健健で御機嫌よく御すごし下さい。

昭和二十年八月十六日夜

英次は『遺書』を黙読しながら、やはり（馬鹿め、死ぬやつがあるか）と呟つぶやいているじぶんに気づいた。「法華経によると、今から十年後には必ず日本が世界を統一して人類が天皇のもとに永遠の平和を楽しむ日が来る」というのだったら、そしてそう信じるのだったら、なぜその日まで生き抜こう、石を噛んででも、屈辱にまみれてでも、生きようとしなかったのか。

この「十年後」という予言は、のちに田中智学系の国柱会から「おそらく書きまぢがいだろう」と訂正を申し入れられたらしいが、十年でも百年でも千年でも、あの男は生きて待つべきだったのだ。英次ははじめてこの『遺書』を読んだときから、ずうっとそうおもいつづけてきた。その思いが、改めて蘇よみがってきた。

どんよりと曇った空の下に、慰霊塔のような大きな石碑いしぼがみえてきた。そこが、香良洲浜だ
った。

英次がまもなく十五歳に達する、一九六〇年初夏のことだった。クラス担任の教師が「高校
進学を希望する生徒は戸籍抄本を用意するように」といった。母にたのんで戸籍抄本をとりよ
せてもらったが、英次はその父親欄の空白をみるまでもなく、じぶんが母親の私生児となつて
いることを知っていた。

かれがその秘密に気づいたのは、ずいぶんとまえのことで、六歳になったばかりのところだつ
た。九州の博多近くの田舎町で小学校に入学すると、同じクラスに父親のいない子が三人いた。
担任の女教師が、他の父なし子たちに対しては、「戦争でお父さんが亡くなって、大変ねえ」
と話しかけながら、英次にむかつてはただ、「お父さんがいなくて、大変ねえ」といったのだ
った。

子供はそういった言葉遣いのちがいについては、とても敏感なのだ。英次はそのとき、幼な
心に（なるほど、じぶんの父親は戦死したのとはちがうらしいな）と気づいたのだった。

母の夫が戦死していることは、たしかだった。家の仏壇にかざってある男の写真は軍服姿で、
裏には、昭和十七年十二月戦死、と記されてあった。六歳のころは、その字がよめるといふだ

けのことで、ふうん、と納得しただけだった。しかし、小学校の三年生ぐらいになると、何となくオカシイとおもいはじめ、そのころには遊び仲間から「やーい、父なし子」とからかわれて、事実は隠しようもなくなった。

父親が昭和十九年の後半か、二十年になって戦死というのであったなら、英次が昭和二十年八月十六日の生まれであつても、その遊び仲間たちのからかいにも弁解できたらう。けれど、昭和十七年十二月の戦死なのだ。中学に入るころには、英次は（おれが母親の夫の子なら、昭和二十年生まれということは、ありえないものな）とおもっていた。

母はその謎について説明するということをしなかつた。英次も私生児だからといってとくにこれまで負い目を感じることはなかつたので、母にその謎を話してくれと強いたりはしなかつた。

しかし、十五歳になろうという今なら、きちんと説明してもらえらるだろう、と考え、戸籍抄本を紙袋にいれたままで、母にいった。

（母さんの結婚相手は、戦争のはじめに中国で戦死したわけだろ？　すると、僕のほんとうの父親は誰なの？　噂では、僕が生まれた昭和二十年の八月十六日、つまり敗戦の翌日に三重航空隊のあつた三重の香良洲浜で自決した、あの男が父親だ、ということになるけど……。どうなの？　教えてほしいな）

英次の口調は、やはり問い詰めるふうになつていたのだろう。それはしかし、非難ということではなく、母に一度きちんと説明してもらいたい、十五歳になる今がそのときではないか、とかれがひとりで思い詰めたからなのだった。

母はまだ四十歳になつていなかった。英次を生んだのが、二十四歳のときである。二十一歳のころにはすでに未亡人となつていたことになる。いわゆる「英霊の妻」というやつだ。結婚したのは、二十歳になるか、ならぬかであつたから、十五歳になる今のおれと大して変わらな
いじゃないか、という強引な理屈さえ胆はらのなかでは考えていた。

けれども、母は答えようとはしなかった。ただ口惜しそうに下唇をかんで、

(男の人つて、結局は死ねばいいとおもつてゐるんだから)

とうめくように呟やいただけだった。必死に涙をこらえていた。母は私生児を生んだということ咎められてゐるとおもつたらしい。(咎めてゐるわけではないのに。それに泣きたかつたら泣けばいいのに、怒りたかつたら怒ればいいのに)、と英次は涙をこらえる母をみながらおもつた。

結局、母は英次の父親について話してくれなかつた。英次の心に残つたのは、母のうめくような呟やきだけだった。その呟やきがあつた男に關してのものだとは、確信できなかつた。あの男が英次の生まれた日に自決したということは、法事や何やらでのひそひそ話や遊び仲間から

のからかい話にすぎなかつたからである。

母は英次の父親については話してくれなかつたが、ただそのころ、こんなことがあつた。中学三年の国語の教科書に、「中宮寺・思惟の像」と題した文章がのつていた。亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』の一節で、英次は家でそれを音読していた。

「……私ははじめて有名な如意輪観音の思惟の御姿をみたのであつた。

深い瞑想の姿である。半眼の眼差は夢みるように前方にむけられていた。稍うつむき加減に腰かけて右足を左の膝の上にのせ、更にそれをしずかに抑えるごとく左手がその上におかれているが、このきつちりと締つた安定感が我々の心を一挙に鎮めてくれる。厳しい法則を柔かい線で表現した技巧の見事さにも驚いた。右腕の方はゆるやかにまげて、指先は軽く頬にふれている。指の一つ一つが花卉のごとく繊細であるが、手全体はふつくらして豊かな感じにあふれていた。そして頬に浮ぶ微笑は指先がふれた刹那おのずから湧き出たように自然そのものであつた。飛鳥時代の生んだ最も美しい思惟の姿といわれる。五尺二寸の像のすべてが比類なき柔かい線で出来あがつているけれど、弱々しいところは微塵もない。指のそりかえつた頑丈な足をみると、生存を歓喜しつつ大地をかけ廻つた古代の娘を彷彿せしむる。その瞑想と微笑にはいかなる苦衷の痕跡もなかつた。

一切の惨苦を征服した後の永遠の微笑でもあろうか。いま春の光りが燦爛とこの姿を照ら